京都寺院に於ける伝統的宗教儀式の研究プロジェクト

平安京と地方の宗教文化

本郷 真紹、毛利 憲一
文学研究科

概要 このプロジェクトは、 平安期以前の神祇祭礼・仏教儀礼の検討を通して、古代日本における宗教文化形成の諸特質を解明することを目指している。その際、われわれは、首都・平安京において挙行された諸種の宗教儀礼と、地方の宗教文化との関連に着目した。それは広くは、首都と地方との文化的な交流の実態と意義をいかに捉えていくかという問題に繋がってくるが、ここでは具体的題材として採り上げた山林寺院の存在様態をめぐり、史料データベースの作成など、当プロジェクトで進めている調査・研究の成果を報告する。

Research on traditional religious rites in temples of Kyoto Project

The Capital Heian and Local Religious Culture

Hongo Masatsugu, Mouri Ken'ichi
Graduate School of Literature

Abstract Our project aims to make some characteristics of the religious culture in ancient Japan clear by the researching on traditional religious rites which were begun before the heian period in Buddhist temples or Shinto shrines. Then, We paid attention to the relation between various rites which were held at the capital Heian-Kyo and local religious culture. It leads to the problem how it takes the actual state and the meaning of the cultured alternating current between the capital and the district. We adopted the temple which existed on mountains and forests as the specific subject. It reports the result of the investigation and the research to be proceeding with by our projects. Specifically, the following the making of the database of historical records about the temple which existed on mountains and forests.

1 首都・平安京の宗教文化

サブ・プロジェクト「京都寺院に於ける伝統的宗教儀式の研究」は、平安期以前の神祇祭礼・仏教儀礼を検討し、そこから古代日本における宗教文化の諸特質を解明することを目指している。京都の古代以来の社寺には、それぞれ特徴的な神事・仏事が存在しているが、その成立過程・史的背景・展開と変容を明らかにすることが課題となろう。

さて平安京における宗教儀礼については、①それを挙行した場である宮廷、平安京内・京郊の寺社、②行った人々、つまり主催者である国家や天皇、貴族、執り行った僧侶、③儀礼やそのための典籍、調度、④それらの具備や寺社の造営を支えた財政や組織、⑤背景となる宗教的知識、観念など、さまざまな側面での検討が可能であろう。そしれこれらいずれについても、首都、すなわち平安京内では完結しない要素が少なくないことに注意したい。

われわれのプロジェクトではこの問題に着目し、平安前期（9世紀初頭～10世紀半ば）、平安京を中心に展開した仏教や神祇信仰などに基づく宗教的な文化現象が、地方社会でどう受容され、そしてそれが結果として首都＝平安京の祭礼や儀式をはじめとする宗教文化の諸現象にどうフィ

ードバックされたか、という視点から調査と研究を推進した。

これは、次のような問題に関連してくると思われる。平安時代の文化は「国風文化」や「王朝文化」といった概念で把握されてきた。これは今日の社会一般にも非常に認知度の高いイメージであり、日本文化の独自性の源流を「王朝文化」「国風文化」にもとめる見解は少なくない。そして、このイメージが今日の「京都」にとって重要な観光「資源」となていることに示されているように、こうした文化は平安京・京都という「千年の首都」で独自にはぐくまれてきたものと捉えられがちである。しかしこれは「京都」イメージを、「京都」という都市空間の内部に閉じこめ説明してきた近代の学問や思潮の影響に過ぎない。「国風文化」や「王朝文化」は、決して「首都」という空間的限定を伴って形成されたわけではない。このことは既に歴史学の平安時代史研究などでは指摘されていることであるが、研究上の知見と社会に流布している時代観との落差は埋まっていない。実証的な研究成果に基づいた新しい平安文化史像を提示していくことは、日本文化論という議論の枠組みじたいを、実態的に問い直すという意味を有するであろう。

平安時代の前期はこうした文化がちょうど勃興してくる時代である。そしてこの時期の平安京と地方の宗教文化上の交流という問題を考えるにあたって、われわれは山林寺院の存在様態に焦点を合わせることが有効であろうと判断した。そこで、以下では山林寺院をめぐる諸問題をまとめ、またこれについての当プロジェクトでの研究成果を報告したい。

2　古代宗教文化史における山林寺院

古代の山林寺院について、その定義、出現背景、歴史的意義などを概括すれば、以下のようである。

まず、「山林寺院」の定義であるが、単純には「山地に位置する寺院」ということになろうが、同時に、機能面で、僧尼の活動で教学研鑽と並び重視された修行の場としての性格を有することが不可欠の指標となる。

本来、「山地」が行場として重視されたというのも、一つには、何よりも俗人との接触を断つことが、煩悩を断じて修行に専念するための重要な要因であり、そのような修行の環境として、人里離れた山地が選定されたことが想定される。のちには、女人垢穢の思想と結びついて意義付けられた「女人禁制の地」という山地の性格も、空海（774～835）や最澄（767～822）がそれぞれ行場としての高野山・比叡山を開いた当初においては、明確にこの点が意識されて女人禁制が規定されたことは確認されず、寧ろ、優婆塞や沙弥・比丘といった男性の求道者が、己の煩悩を断ち修行に専念するために、女人との接触を自主的に忌避したことがその要因となった可能性が高い。法会の場等においては、僧と尼の同席が全面的に禁じられておらず、やはり修行の便によるものと受け取る方が自然と考えられる。同様の側面から、俗人との接触を断つことが可能な場として、人里を離れた山地はまさに修行に適した場として意識されたのであろう。

第二に、日本古来の、あるいは、大陸より伝来した、山地に対する清浄の観念が強く作用した点が挙げられる。古代における清浄性重視の姿勢は、諸史料より明確に見て取られるが、仏教の興隆と統制を独占しようと図った律令国家が僧尼に求めたものについても、この清浄性の創出と維持が大きな部分を占めていた。政治や社会の情勢の円滑なることを願った為政者は、その障害を導く「穢れ」を極端に忌み嫌い、これを払拭するための手段として、また常に「穢れ」の無い状況を維持するための手段として、寺院や僧尼といった仏教の諸要素に期待を寄せたのである。僧尼がこの清浄性を創出し維持するために、清浄なる空間で定められた行を修する必要があった。このような必要性から、山地が重視されたと考えられる。

第三に、仏教伝来以前の段階から日本で独自に形成された、山地に対する信仰が挙げられる。アニミズム（自然崇拝）の段階において、諸自然が人格化され、神としてイメージされたが、

山とて例外ではなく、とりわけ、人間生活の根源的要素である水を司る存在として、山の神に対する信仰が形成された。山の雄姿は、美的感覚に訴える部分も大きく、神の降臨する場として相応しい存在と捉えられた。また一方で、数千メートル級の急峻な山岳は、これを仰ぎ見る地域で生活する人々にとっては、容易に足を踏み入れ難い禁足の地として意識された。まさに、畏怖すべき対象として強いインパクトを与え、神の性格を象徴するものとして受け止められ、やがて山岳自体が神として崇められるに至ったのである。

以上に挙げた三つの山地に対する認識が融合し、新たな意義が見出されたところに、行場としての山地の利用が図られたと考えられる。伝来当初の仏教と神祇との関係の如く、両者が同質且つ対立する存在として受け止められている段階では、このような融合が一時に進展した訳ではなく、文化面で先進性を誇った地域、具体的には、大陸の文化がいち早く入り込んだ、渡来人の居住地等で、仏教のみならず中国の民間信仰たる道教の影響も被る形で、山林修行が行われるようになり、神仏関係に調和的な解釈が普及するにつれて、次第に各地に広まったと推測される。

文献史料で具体的な山林修行の実態が確認しうる例としては、7世紀末～8世紀初頭に登場する役小角がその先蹤と言うことが出来るが、周知の通り、小角は後世、山林修行を旨とする修験道の祖として崇められることになった。しかし、当時の朝廷は、山林修行に対し、一定の効果を認識し、これを奨励しながらも、無制限に許容したわけではなかった。僧尼令にその事が明記されているように、所属寺院での生活を基本とする官僧・官尼の山林修行に際しては、許可を得ることを前提としていた。役小角が朝廷の弾圧を蒙ったことに窺われる通り、個別人身支配の一環としての僧尼の把握に対する障害や、宗教的秩序の混乱を危惧して、朝廷は厳格な姿勢を打ち出したと推察される。

一方、得度を目指す優婆塞・優婆夷からすれば、のちに得度の条件に謳われることになる「浄行」を修することは、山林修行を実践することに他ならず、得度を経た沙弥・沙弥尼や、受戒を経た比丘・比丘尼にとっても、自らの経歴として山林修行は、清浄性の獲得・維持は言うに及ばす、そこからもたらされる神秘的な呪力の確保という点においても、その立身の上で、学業と並び重要な意味を持った。月の半ばは所属する寺院で学業に励み、半ばは山林に入って修行に勤しむといった生活が、僧尼にとって理想とされたのである。僧尼の登用を図る有力者の立場からすれば、高学・高徳の僧尼たることを認証する指標は、高い学識と修行の経歴であり、このうち後者は、有効な呪力を確保するための手段という点で、有力者の望む現世利益、とりわけ治病能力を獲得するのに不可欠な要素として、高い評価を受けた。この能力に秀でていると認識された僧＝禅師が、その治病の功績により結果として破格の出世を遂げることになった。奈良時代の著名な僧綱の中に、治病能力に秀で、著しい功績を挙げたことが共通して窺われる所以である。このような風潮の中で、山林修行は時と共に各地で盛行するようになり、その拠点として相次いで山林寺院が設置されたと考えられる。

山林修行の隆盛がもたらした社会現象の一つとして、神仏混淆を挙げることが出来る。先に触れたように、従来自国の神と異国の神（＝仏）という同質の存在であるが故に、当初互いに相触れぬものとして認識されていた神仏が、接点をもち、やがて理論的な裏付けを得て併祀されるようになる。その一つの重要な契機に、山林修行の隆盛があった。もともと他の信仰に対し融合的・包摂的な性格を有した仏教は、大陸においても道教といった在地の信仰との融合を遂げたが、日本においても、仏教は在来の神祇を自らの論理体系の中に含み込み、新たな神祇の位置づけを導いた。本来固有の教義を有さない神祇信仰は、仏教信仰との並置にさしたる困難を伴わず、朝廷の仏教に対する依存度が急速に増大するにつれて、次第に仏教的な解釈を施されるようになったが、このような動きが急速に展開したのは、本来は固有の神祇信仰に依拠した存在である筈の聖武天皇（701～756）・光明皇后（701～760）といった王権の側で仏教信仰が昂

揚した天平年間のことであった。入唐留学僧玄昉(？～746)の帰朝により唐よりもたらされた多数の経論、とりわけ、山林修行の隆盛と密接な関係を有する密部の経論の将来・普及が、大きな意味をもったと推察される。この時期に見られた大規模な仏教興隆事業の推進と、大量得度による僧尼の急増が、やがて尼天皇称徳(718～770)の即位や法王道鏡(？～772)の出現を導く布石となるが、政局の大きな流動とは別の次元で、神仏混淆はさらに進展し、新たな山林修行に対する位置づけの中で、最澄・空海による密教の体系的導入をよぶことになった。

3　山林寺院関係史料データベースの作成

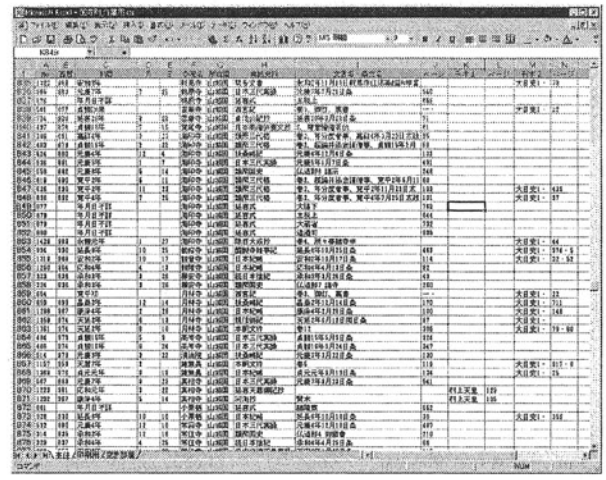
2節のように古代宗教史上における山林寺院の特質を捉えた上で、われわれは古代の山林寺院に関する史料の集成作業を行った。その成果として発表した「古代山林寺院関係史料データベース(稿)」はどちらかというと資料目録的な性格を有するもので、本格的なデータベースとしてはまだ発展途上の段階にある。そこで当プロジェクトでは更に改訂を加え、採録情報を見直した上で、本格的なデータベースとして公表するための作業を行っている。

基礎としている資料目録じたいは、時期を平安前期に限らず、古く遡って飛鳥・奈良時代も対象として資料を収集した(具体的には6世紀から『大日本史料』第一編の対象時期[下限は寛和2〈986〉年6月]までを範囲とした)。

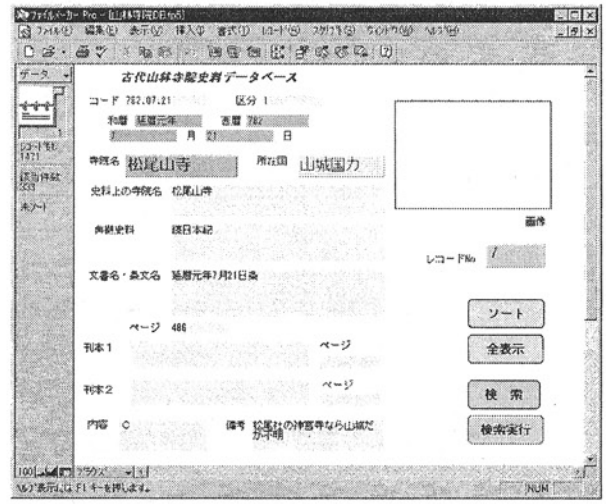
また「山林寺院」を「山林にあって修行の場となっている寺院」及び「それと同等の機能を有すると判断される寺院」と、広い観点から捉え、醍醐寺、安祥寺(いずれも京都市)、新薬師寺(奈良市)など平地に立地し伽藍を有するが、山林寺院に共通する性格の存在する施設を持つ寺院の史料も採録している。一方、地方の寺院で山林寺院とできるかどうか不明なものは基本的に採録することにした。したがって今後はそれらをいちいち再検討する必要を感じている。

収集史料は、六国史やそれに準ずる史書典籍、法令、また古記録、古文書、儀式書が主な対象だが、仏教系の史書や各寺院の記録類、説話集も対象にしている。これも範囲を個別寺院に伝来する史料類を視野に入れて再調査する必要があろう。

公表した「古代山林寺院関係史料データベース(稿)」(挿図1)はデータ件数にして1471件に及ぶ。採録情報については、暦日、寺院名、所在国、典拠史料(文書名・条文名)とその刊本のページ(複数ある場合はそれも採録)を目録化しているが、史料上の寺院名(略称や異称である場合が少なくない)や史料の内容は省かれている。現在作成中の新データベースではそれらも採録し、また他に必要な情報を追加すべく検討



【挿図1　資料目録の画面】



【挿図2　データベースの暫定画面】

している。現在は暫定版（挿図2）の段階であり、より有用なものとしたいと考えている。

4　地方の山林寺院と平安京

さて山林寺院は、2節で触れたように、古代国家が僧尼になる条件として山林修行を位置づけたこともあり、平安時代に入ってからもその造営はさらに盛んに行われた。特に平安時代初期から勢力を伸張するの密教系の宗派に着目すると、それらは京内の東寺以外では高野山や比叡山など、その宗教的基盤を地方の山林寺院においていた。また安祥寺や醍醐寺など、平安京近郊の勅願寺が山林寺院の性格を併せ持つことにも注意しなければならない。天皇や貴族が、延暦寺をはじめとする山林寺院に参詣することは多く確認され、僧侶の往来はもっと頻繁であった。こうした上流・知識階層の宗教活動を伝える史料はたいへん多く、首都と地方の宗教的交流を知る格好の材料であるといえる。

一方、諸国の寺院においては、法会などの儀礼の際、平安京や南都の大寺院から僧侶が招かれたことが先学によって指摘されており、そこでの法話などを通して、今日伝わる仏教説話が形成されたという事実も近年明らかにされたところである。おそらく地方寺院の寺院縁起なども、こうした過程なのかで生み出されたと見られ、なによりも、王族や貴族の子弟が出家して、地方に寺院を開くという事例がいくつか存在する。そうした地方寺院の造営は、当該国に派遣されている国司（受領）の支援によって行われる場合が少なくなかった。

これら中央と地方の宗教文化史上の交流関係は、具体的なフィールドを設定し、実態を掴んでいくことで、その歴史的意義や文化史的な特質が明らかにされていくであろう。当プロジェクトで作成しているデータベースはこうした問題を検討する際の基礎的作業となるものである。これに関しては、北陸地域をフィールドとし、中央と地方の宗教文化史的交流を考察した研究成果として、プロジェクトリーダー・本郷による文献②及び③が刊行されているのでご参照いただきたい。

ここでは現在、毛利が研究対象として採り上げている播磨国の書写山円教寺の事例を紹介しておきたい。

書写山円教寺がある播磨国は、古代国家形成期から王権との密接な関係を有し、いち早く先進文化が導入されており、律令制下も「大国」の地位を与えられた豊かな国であった。平安京遷都後も、首都と距離的に近いため先進文化の移入がより速く行われ、しかしその一方で首都の文化の直接的影響は受けず、独自の宗教文化を揺籃するに適度な距離を保っていたと思われる。そのため播磨国には今日も平安期以来の寺院や宗教的な文化財が多く残り、史料にも比較的恵まれている。

書写山円教寺は、現在の姫路市北方、夢前川西岸域の山地に所在し、播磨国内屈指の古刹とされる天台寺院で、「西の比叡山」とも呼ばれた。開祖の性空上人（910？～1007）は、中流貴族の橘善根（従四位下）を父に持つ人物で、36歳で出家し、霧島山などで修行をしたのち、康保3（966）年、書写山に入って、ほどなく円教寺を創建した。

この性空をめぐっては、平安貴族の子弟であること、花山法皇（968～1008）の二度の行幸をはじめ、皇族・貴族（例えば慶滋保胤［931？～1002］）の篤い信心を受けたこと、創建に際して播磨国の受領の支援があったことなどが、諸種の史料から確認され、首都・平安京と地方山林寺院の交流関係を知るためのたいへん良好な事例といえる。

また花山法皇勅撰と云う「書写山上人伝」が『朝野群載』（巻2）に収載され、この他、仏教系典籍（『元亨釈書』など）や説話集（『今昔物語集』など）も様々な逸話を伝えている。さらに書写山の場合、比叡山との密接な関係が存在し、仏事は延暦寺のものがそのまま持ち込まれたとする史料もある。

右のような諸事実をより深く検討していくことは、次年度以降の課題とせざるを得ないが、平安京で「王朝文化」や「国風文化」を担うことになる皇族・貴族あるいは僧侶のような知識人、地方に派

遣された受領といった人々の信仰や宗教意識に、平安京という都市空間に規定されない部分が存在したことは明らかである。

またこうした事実から、「王朝文化」「国風文化」と把握されてきた平安期の首都における宗教儀礼・宗教文化を逆照射するならば、新たな視点でこの時代の文化の総体を捉えられるのではないか、という予測に立つことができる。それをより立体的に探究することをさらなる課題としておきたい。

おわりに

当プロジェクトの研究成果を山林寺院の問題に絞って述べてきたが、いまだ課題は多い。平安京における宗教儀礼の研究に、山林寺院の具体的検証をどう有効にフィードバックしていくかは、その最大のものである。また「現代の儀礼・祭礼との比較」という研究計画に関しては、なお成果を公表できる段階にない。現代における「王朝文化」「平安文化」のイメージを更新するのが、本報告で述べた「地方との宗教文化史的交流」の研究ならば、これはそうしたイメージじたいの生成をめぐる研究となるはずである。儀礼・祭礼のあり方が「古代」からどう変容し、あるいは「改造」されたのか。その具体的プロセスを問うことは、昨年の成果報告会でも課題として指摘したが、次年度、なんらかの取り組みを行う必要があろう。当面、次年度は、国際シンポジウムの企画やデータベースの公表を計画している。今後とも広い視野から、多様な研究者との交流も通して、より豊かな成果をあげるべく努力したい。

【関連文献】

①本郷真紹・山本崇・志麻克史・毛利憲一「古代山林寺院関係史料データベース(稿)」(本郷真紹研究代表『奈良時代・平安時代初期に於ける山林寺院の実態とその史的意義』立命館大学、2003年)
②本郷真紹『白山信仰の源流』(法蔵館、2003年)
③本郷真紹『律令国家仏教の研究』(法蔵館、2005年)
④薗田香融「古代仏教における山林修行の成果とその意義」(『平安仏教の研究』法蔵館、1981年)
⑤鈴木景二「都鄙間交通と在地秩序」(『日本史研究』379、1994年)
⑥姫路市史編集委員会『姫路市史』史料編Ⅰ(1974年)
⑦姫路市史編集委員会『姫路市史』第三巻(1980年)
⑧兵庫県立歴史博物館『総合調査報告書Ⅲ　書写山円教寺』(1988年)